
タカシと愉快な学友共めひれ伏すがいい。徒然なるままに。

吏

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タカシと愉快な学友共めひれ伏すがいい。徒然なるままで。

【NZコード】

N5911D

【作者名】

吏

【あらすじ】

完結しました『タカシと愉快な学友共めひれ伏すがいい。』<http://nocode.syosetu.com/n2566d/>では書く機会に恵まれなかつた人達の一面を見せます。本編を見た後の方が基本的に楽しめると思います。どのくらい続けるのかは未定です。また気長にお付き合いくださいると嬉しいです。

【豊泉院力オルの場合】

【豊泉院力オルの場合】

「ねえ、豊泉院さんには気になる人とかいないの？」

「いきなり何の話だ。佐伯スミ」

斗葉高校生徒会長・力オルの後ろの席の女子が、そう問い合わせてきた。このクラスの座席は出席番号順ではない。

「いないの？」

「いないな」

つれない返答をする力オルにスミがつまらなそうに、眉をひそめた。

「風紀委員が浮ついた気持ちでいられると困るな」

「やだなー、もう。公私混同、今はクラスメイトー」

冗談交じりで言つただろう力オルの言葉にスミがふふっと笑つた。彼女は生徒会長様のファンクラブ会員でもなんでもない、普通に話せる女子生徒だった。

「それに風紀委員は愛しのカレがいるから入つたの一ー」

「3年の葛城タスクのことだな」

「知つてるのー？」

「知つていても何も、いつものろけているだらう」

あきれと諦めの表情を見せる力オルにスミが自らを抱きしめ、ほうと陶酔している。

「やーん」

「異性との交遊を認めないわけではないが、節度だけは守るよう

に」

葛城タスクは警察剣道をやっていたこともある硬派な男子生徒で、風紀副委員長を務めている。大学受験のある忙しい身でありながら、スミとは3ヶ月ほど前から付き合つているそうだ。

「あのむれた面や籠手のにおいがたまらないのつ」

「いいな」

「そうか」

きやーきやー言つスミにカオルが表情を崩さず、やんわりと抑えた。顔や性格ではなく、まずあの夏場のきつい臭いから好きになつたというのだから人の好みといつのはわからない。

「で、無敵の生徒会長様にはそういう人いないの。異性で」

「急に話が戻つたな」

他人の恋話というのは否応にも盛り上がるものであり、それが校内の有名人のものなら人垣^{ヒガニ}が出来てもおかしくない。

「いないな」

「いるでしょー、一人くらい。花の女子高生がー」

そういうことでくくられても困る、とカオルはにべもない。スミはそれでも食い下がる。

「じゃあさ、男子でぱつと一番最初に頭に浮かぶのは誰？」

「一番最初に？」

「そー」

そうやって思い浮かぶ異性は、少なからず意識しているものだろう。スミにはその自信があった。カオルもすぐに答えてくれた。

「一番最初に出てくるのは学籍名簿の一一番上、あ行だな」

「……ごめん、そういうことじやなくて」

この全生徒・教師の名前などを完璧に把握しているという生徒会長様はどうにも手こわい。聞き出したいところはそういう事務的なことではないのだが、カオルの言葉はとまらない。

「……名前は　　あい」

カオルの言葉がとまつた。それとほぼ同時に遠くの方から、何か物音が聞こえた気がした。

「麻島タカシ、甲藤ミツル！ 魔王か」

席を立ち、カオルがすつと教室から出て行く。何かまたしでかしたらしい、と察知したようだ。

「……ありや」

スミはその素早い動きに感心し、あきれていた。他クラスのこと

など放つておけばいいのに、と苦笑している。

「なんだかなあ」

同じようにスミは廊下に顔だけ出して、タカシ達と何かやりあつているカオルをのぞき見た。既に騒ぎを収め、厳重注意をしているところだった。

「ふーん」

以前より、カオルの表情がやわらかくなっているのは氣のせいだろうか。1年の時からあつた近寄りがたい、話しがたい頑な雰囲気もぼぐれているようだ。

「ああいうのも、ま、ありかな」

田を細めつつ意味深に微笑み、小首をかしげながらスミは教室のなかに顔を引っ込んだ。その表情は、少しだけ満足げなものだった。

【武島イズシの場合】

【武島イズシの場合】

「たあーけしまセンセツ」

昼休みの半ば、武島教師が廊下を歩いていると保健医の生方ナエ女医が声をかけてきた。そして、それにかまわない。

「あー、無視しないでー」

「忙しいので」

数学科の部屋に入ると、生方女医もするりとなかに入り込んだ。武島はかまわず、無視して自分の席に着く。

「あなたにも仕事があるはずだが」

「ヒマなもんで」

えへへと笑う生方女医をじろりとこちらみながら、机の上に大学ノートを広げる。

「いつ生徒が来るかわからないでしょう。早く戻つてください」「だいじょーび。ただいまお留守です、つてフダをぶらさげていたから」

何かあれば職員室の方に行くように、とも書かれてある。保健室に保健医が常駐しているわけではない。

「感心はしませんがね」

「それがウワサの闇魔帳ですか？」

生方女医は注意を聞こうともせず、机の上に広げられたノートを武島教師の目の前からかすめ取つた。「返しなさい」という言葉も耳に貸さず、へーほーとバラバラ斜め読みする。

「うつひやー、ほんとに暗号で書いてあるう」

「……暗号ではありますん」

何が書いてあるのか読むことが出来ないという闇魔帳について多く語らない武島教師が静かに、はつきりと否定した。

「じゃ、どこかの外国語?」

珍しい反応に生方女医は、出来る限り探しを入れようと訊いた。

「いいえ。ただ単に字が汚いだけです」

「え」

微妙な、何とも言い難い間^まが生まれた。さすがの生方女医も固まつてしまっている。その隙に武島教師が闇魔帳を取り返した。

「板書も苦手ですが、現国などとは違つて文字を書くことは少ないですからね」

数式や数字は字の汚さを自覚していれば、そう反映することはない。闇魔帳に書いているのはどうしてマイナスなのか、数字以外にそれを書いているから読めないものと言われているのだ。

「でも、武島センセはよく生徒さんの質問に答えてるじゃないですか」

「ネットやメールを通してですね。ファックスもパソコンでうつたものを印刷したのを送っています」

キーボードなどでうつ文字では、字の汚さが出るところはありえない話だった。授業も生徒に答えさせた問題の解説からはじめ、絶対に読めなくなる問題文を書くことを抑えていた。

「そんな理由だったんですか……」

「ボールペン習字で練習していますが、どうも成果が上がりません」

意外な事実に生方女医は素直に驚いていた。読めない闇魔帳の答えがそんなシンプルなものというのを、今まで誰が想像した。

「それと、今この手にある闇魔帳は生徒のものではありません」

生方女医が斜め読みした限り、それはほぼマイナスが続いていた。加点無しとはいって、そこまで続くのはよほど落第生かそればかり集まるクラスだろう。

「いえ、これは自分の闇魔帳です」

「自分?」

「日々の自己評価といつやつです」

更に驚いた。数学科の部屋は皆出払つていて、この2人以外いな

いからか武島教師も饒舌だ。
じょうぜつ

「もう少しわかりやすく教えられた、授業の時間配分。……年が終わる頃には自分の点など残つていません」

武島教師が生方女医に改めて自己評価の闇魔帳を手渡した。改めてなかを眺めるが、その読めない文章は直らに關しての改善点、反省点がびっしりと書かれているのだろう。

「最近、女子生徒の夜間外出を許可した上、自分のPCまで貸してしまいましたね。その日はマイナス10点です」

日付だけならかるうじて読める。9月14日だ。

「ありや、お堅いセンセにゃ珍しいですね」

「言い訳はしませんよ」

その女生徒は武島教師のお堅い理性を突破させ、行動に移させたのだからただものではない。

「何故か、校長からも教頭からもお咎めを受けませんでしたが」「日頃の行いがいいからですよ」

その後、武島教師が報告したもののお咎めが無かったのは、女生徒が何らかの形で動いたことを知らない。知れば、ただちに武島教師は自分を罰することだろう。

「にしても、自分に対して赤点が多すぎないですか」

生方女医の言つ通り、文字は読めなくともマイナス数字だけはかるうじてわかる。ほぼ毎日つけられているそれは厳しそうるほどだ。

「……現在の数学は難しそうるんです。まず教科書からして、教え方が下手なんです」

「？」

勉強から遠く離れた生方女医には何のことかわからない。わかりやすい好例を、武島教師が思い出す。

「フランスでは九九を 5×5 までしか教えないそうですね」

「えー、それじゃ9の段とかどうするんですか？」

冗談と決め付ける生方女医に武島教師が不敵に微笑む。滅多に見られない表情だ。

「では、7 \times 8をしてみましょう。左手で7を、右手で8を指折りで数えてください」

生方女医が「えーと」とつぶやきながら、指を折つて見る。左の親指から折り始めて、最後には小指と薬指の2本が立つた。右手も同じように親指から折り始めて、なか・薬・小指の3本が立つ。

「では、立つている指の数で足し算してください。折つている指はかけ算です。出来ますか?」

「バカにしないでくださいよ」

7を数えた左手で立つてている指は2本、折つている指は3本。8を数えた右手は立つてている指が3本、折つている指は2本だ。立っているのは $2 + 3$ 、折つているのは 3×2 。

「立つている指の答えを10の位、折つている指の答えを1の位にすると」

「5 6だ」

$$7 \times 8 = 56.$$

「1」のように 5×5 より大きな九九は、幼稚園児や小学1年生のみに指を折つて計算すれば事足りるんです

「え、ええ！ ビーして、ビーして出来るのぉ？」

生方女医は驚いている。他の九九も指折つて試しており、81通りもあるそれを必死になつておぼえたあの頃が悔しくて仕方ない、といった感じだった。

「……こんな風に数学はもっと簡単に教えられる。わざわざ難しい公式を丸暗記して・あてはめずとも、抜け穴のようなやり方もあるんです」

教科書通りにやることが損とは言わない。そういうたどりしてこうなるのかといつのがわかる正しいやり方をおぼえてこそ、抜け穴が活きてくる。

「しかし、いつも難しいと思わせるような教え方ばかりするから、今の若い子供は数学が嫌いになつていくんです」

「……つけあー、そういうことですかあ

武島教師の言葉に生方女医は感心している。確かに学年があがる「」と覚える公式や数式が増えて、それとともになつて数学を嫌いになつていく子供が増えていくのは事実だった。

「生方先生、そろそろ保健室に戻つたらどうですか

「そうですねえ」

昼休みもそろそろ終わる。九九のくだり辺りから、数学科の他の教師達も戻り始めていた。

「今日の午後は体育の時間もないし、ヒマなんだけどなあ

「こちらもまだ授業準備があるので」

九九などを話している間も武島教師の手作業は止まつていなかつた。前日までにそのクラスに合つた入念な授業準備をし、直前まで怠らない。個人の質問受け付けや進度具合による個別プリント製作を考えると、いつ寝ているのかと思うくらいだ。

「いやあ、今日は意外な」とばかり知りました」「

「そうですか」

読めない闇魔帳の秘密、武島教師の自身と数学教育への憂い、いずれもお力たれ授業態度からは想像もつかない」とばかりだつた。

「こういうところを生徒さんに知つてもらえば、センセの人気は上がると思いますよ」

「余計なことは教えるつもりはありません」

小首をかしげウフと微笑む生方女医の言葉を、武島教師はきつぱりと切り捨てた。

【甲藤ミツルの場合】

【甲藤ミツルの場合】
ある昼休みのことだった。

「タカシって曰乳好き?」

「いきなりなんだよ

危うく吹きそうになつたお茶を置いて、ミツルをにらんだ。

「朝来野さんって意外とあるなー」と

「どこの見てんだ」

「ワシがジャージを借りた時もそう思つたぞ」「男の会話に魔王がずすりと割つて入つてきた。女子は遠巻きにやーねー、などと言つていそうなものだ。

「魔王さんも興味あるんだ」

「うむ。胸部の小さい大きいは一番わかりやすいセックヌアピールじゃしのう」

じゅーとバナナジュースを一口飲み、魔王は軽くうなずいてみせる。

「朝来野さんはこはあると思つね。ちなみに魔王さんのカップ数は?」

「つけてない」

がたたんつとタカシが突つ伏した。ミツルもじん引きだった。

「フン。ワシの大きさ程度じゃ要らんじゃろ」

「大きさは別として付けておいた方がいいぞおおつ、魔王おおー...」顔を真っ赤にしながらアンナが飛び込んできた。

「せ、せめてか、形を保つためにもおおつ...」

「そういうものかのう。どうもアレはわざりわしくていかん」

「アンナはBだけ」

ミツルがいけしゃあしゃあとバラすと、アンナが半泣きになつて

その肩をつかんで揺さぶつた。

「//ミツルは大きい方が好きなのかああああああ！」

「ううん。『小さいのを気にしてる』のがいい」

H A H A H A H Aとマニアックな発言をするミツルを、アンナが思い切り抱きしめた。

「ミツルにふさわしい女に私はなるぞおおおおおお！」

「うるせーよ」

うんざつしたようにタカシがつぶやく。この2人に会わせていたらきりがない。

「豊泉院会長はEかFくらいあるよね」

「なにっ」

魔王がいきなり対抗心を燃やした。しかし、まったく勝負になつていない。

「この学校で一番ムネがでかくてスタイルいいよ。対抗馬は他校でもそうはないね」

「モデル並だよなああつ！」

都心のように頻繁なスカウトがあるわけでもなし、本人もお堅いオーラ出しているので近寄りがたい。

「ハ鍬副会長は魔王さん以上アンナ以下のB、書記の瀬川さんはお椀型でこだね」

「うぬ、皆ワシよりでかいのか」

見た目は小学生並の魔王がじとじと見上げる。やはり悔しいなどと感じるところはあるのだろう。

「しかし、甲藤は変態か？」

「ミツルは変態じゃないいいいいつ！」

「うるせーよ」

アンナが必死に否定するが、じとじらむ魔王の目は冷たい。

「仮に変態じゃないにしても、いくらなんでも詳しそぎぬか？」

アンダーとトップでわかるバストサイズを知っているということは、個人情報レベルを知っているといつても差し支えない。本人も教えたがるものではないだろう。

「詳しく述べても、せいぜい同じ超・生徒会のメンバー内く
らいだよ」

「まあ、やつらにはファンクラブがあるからにそのくらいの情報
流出は……」

魔王の言葉が止まつた。ミツルの台詞に違和感を覚えたからだ。

「……聞き間違いか？」

「何がさ」

「甲藤」

有無を言わさぬ魔王のプレッシャーにミツルが肩をすくめた。

「まだ言つてなかつたつけ」

タカシの方を見るミツルだが、向こうは知らん顔している。

「言え」

「……超・生徒会の庶務やつてます甲藤ミツルです」

ミツルは素直に言つたつもりなのだろうが、魔王はまだにらんで
いる。困つた顔をしながら、タカシに助けを求める。また無視され
たようだ。

「だつて俺がいなくてもあの4人で超・生徒会はやつてけるしさ

ー

「もう少し早く言わぬか」

魔王の言葉にミツルは近くの自分の席に戻り、座つた。

「早く言つて魔王さんに何のメリットがあるの？」

「敵の懷に身内がおれば、うまく利用することを考えるじやろ」

その行動をとつて、敵にばれるなどした時に身内がどうなるかも
考えなければ動いてはくれないだろつ。それと知つてかミツルはH
AHAHAHAと笑つている。

「まーね。でも、必要な時はちゃんとメンバーとして動くよ。文
化祭みたいなイベントには中心になつて参加しなきゃなんないし」

庶務の仕事は主に雑多の事務が基本であるが、その程度のことは
無敵の生徒会長様がついでにやつてしまつ。仕事を取つてしまつ
ではなく、ミツルが来る前に終わつてしまつことが多いのだ。

「ま、ま、イベント期間は忙しいよ。地域や他校と接触して提携を持ちかけたり、向こうのそういうポスターを預かったりね。ベルマークは集めたことないや」

ミツルの幅広い情報網はここからきていたのだろう。他校や地域との交流や接触の機会だけなら生徒会長様より多いが、最終的な判断・指示は彼女を仰ぐことになっている。だが、それも電話があれば事足りてしまう。

「校内にどまらないのが俺の仕事なわけ」

「都合のいい解釈じやのう」

超・生徒会の窓、外交官などと称すると聞こえはいいが、実際は生徒会室に滅多に寄らない問題役員だ。

「まあ、庶務であれなんであれ、変態には変わりねーけどな」

「うむ」

「あ、やつぱり？」

「ミツルは変態なんかじゃないいいいいい！ 人よりも好奇心が強いだけなんだあああああああああああ！」

流石に同級生の個人情報、バストサイズまで把握しているのはおかしい。ミツルがH A H A H A H A H A H Aと笑つて「まかし、またところで昼休み終了」のチャイムが鳴った。

【麻島ミカコの場合】

【麻島ミカコの場合】

昼も過ぎ、人通りもまだ無い頃合だった。

「小腹がすいたねえ」

ミカコはのんきにそうつぶやいた。昼飯は食べたが、店に出て身体を動かすとおやつが欲しくなつてくる。

甘いのはなかつたねえ、そりいえば。

買つてきたその日に魔王がほとんど食べてしまつようになったので、今すぐつまめるようなちゅうどいいものは残つていらないだろう。

「流石に買いに行くほどでも……」

今は店にミカコ一人、店を閉めるわけにもいかない。

「じゃ、作つちまうかね」

その手があつた。店を閉めるわけでもないし、台所にいるから客が来てもすぐに対応出来る。商店街のなか、店頭の野菜を白昼堂々盗もうとするわけもない。

「うんうん」

ミカコはうなずいて、店の奥へと引っ込んで台所へ向かつ。

「薄力粉と砂糖、卵に牛乳」

それと深皿2枚か耐熱ボウル、金ざるなどこの家庭にもあるもので、甘いもの好きなら口元が思わず緩んでしまうものをこれからつくる。

「力スターードクリームでもつくらうか」

突然の客が来ても大丈夫なように、鍋の火にかけるような本格的なものはつくれないのもわかっている。ミカコはこれから電子レンジでそれを作ろうというのだ。

「深皿に薄力粉大さじ2、砂糖大さじ3を混ぜる」

砂糖は出来上がりの色に関係してるので白が良いが、黒でも味は同じだから気にしない。

「混ぜた粉に牛乳200mlを入れる」

だまをつくりないように、少しづつ入れるといい。だまになりにくい薄力粉というのも売っているから、それを使つとより作業が楽になる。

「それにとき卵を1個分・全部入れて、また混ぜる」

卵は白身と黄身をはしでよく混ぜてから、入れることだ。濃厚な味が好みなら卵黄だけでつくってもいいのだが、余った白身が勿体無いのでミカコは一緒に入れてしまう。

「金azardeこす」

そうするとだまや白身が引っかかってくるが、気にしないならやらなくともいい手順だ。しかし、ミカコはカスタードクリーム好きなので割と気にするのだった。

「こしたのをラップにかけて電子レンジで、600Wで2分間チ

ン」

その間に使つた皿や道具を洗つ。手馴ればこじまでもくるのに5分くらいしか、かかりない。

「チンしたら1回取り出して、また混ぜる」

混ぜたらもう一度レンジに入れ、今度は30~40秒かける。終わつたら、また取り出す。

「そのたびに混ぜる。合計で3分（最初の2分+40秒+40秒）超えると何かたまりのようなものが出来るけど、気にしないで混ぜる」

「こじで面倒だからと言つて最初から3分レンジにかけてはいけない。長時間入れると出来損ないのプリンのようなものになつてしまふ。」

「火を使う手間を省くぶん、このくらいは我慢我慢」

気長に30~40秒の加熱を4~6回ほど繰り返してみると、ただの黄色い液体だったのが段々クリーム状になつてくる。やりすぎると出来損ないのプリンになつてしまつので、ほどほどじめでおく。

「おつと、バーラエッセンス忘れてたよ
ミカコが1滴振りかけ、また混ぜ込んだ。いつ入れても大丈夫、
とミカコは気にしない。

「出来た」

所要時間は15分もかかっていないのに、あつという間にカスタードクリームが出来てしまった。火を使わないから、小さな子供でもつくれてしまうレシピだ。

「さて、お次はパンだね」

冷蔵庫に入れ、冷えて固くなつた食パンを取り出し、深皿のふちの上に乗せて30秒チンする。こうすればトーストではない、焼きたてのように柔らかくなる。わざわざ深皿でやるのは、平皿でやるとパンの裏に蒸気がこもつてべちよべちよになるからだ。

「一口チョコが残つてれば、一緒に乗せて溶かしたのにねえ」「面倒な湯煎なんてしない。ただ食パンの上に2個ほど乗せて、一緒にチンすればとろとろにとけてくるのだ。

「うん」

おいしそうな湯気の出る食パンに出来たてのカスタードクリームをのつける至福の時間だ。保存料など一切使わないカスタードクリームは人肌の時が一番雑菌が繁殖しやすいので、食べない分は冷蔵庫に入れてしまう。

「いただきます」

ミカコが一口それを食べ、にんまりと笑つてしまつ。店に出ていた時の疲れなどすぐに吹つ飛んでしまう。

「冷やしたのも好きだけど流石に待てないものねえ」

熱々のパンに冷えたカスタードクリームがとけていくのもたまらない。ミカコは更に一口食べた。

……おやおや。

聞き覚えのある足音が近づいてきたのに、気づいたのだ。

「ただいま、ミカコ何か食べておらぬかっ」

「おい、いきなり何言つてんだ」

魔王とタカシが学校から帰ってきたのだ。魔王が家のなか走るのをタカシが追いかけて、止めにきたといつどいるだろ？。

「おかえり」

「ミカロ、何を食べておるんじや」

「カスター・ド・クリーム」とパンだよ」

「ワシのぶんはつ」

「ちやんとあるよ」

ミカロは皿らのパンを全部口に入れてしまい、立ち上がった。あのカスター・ド・クリームレシピは結構な量が出来る。

「魔王、お前ほんといい加減にしろよな」

「ミカロ、すぐ食べてもいいか」

「うがいとかしてきな。その間に用意しといであげるから」

タカシが「無視してんじやねーよ」と言うが、魔王は聞く気がない。さつと洗面所に飛び込んでいった。

「つたぐ、魔王のやつはしじうがねーな」

「タカシはいるのかい」

「おれはいーや。店出でる」

素つ気ない息子にふつと微笑み、ミカロは電子レンジに食パンを2枚入れた。持つていけば店先で食べるだろ？。

おいしいものはみんなで食べるのが一番さね。

ほつと笑顔になる幸せで甘い家族の味を、ミカロは楽しめた。

【麻婆://カーフの場合】（後書き）

実際につくれるレシピです。ぜひお試しください。
まだ何か不安な方は『簡単 カスタードクリーム』とネット検索すればそれらしいのが引っかかります。

【常木えなの場合】

麻島青果店前、夕方より少し早い時間。

「ヒマジヤのう」

そう堂々と魔王が口に出した。

「うるせーよ」

その横で野菜の入った段ボール箱を持つているタカシが、そのカドで魔王を小突いた。

「ワシの呼びかけに応えんとは平民どもめ」

「勝手言つな」

ぎやあぎやあと言い合つ2人を、その横でミカコがあつはつと笑つてゐる。

「ぬう」

魔王が下を見ると、ぎゅっとその服のすそを幼児がつかんでいる。2~3歳くらいの、女の子だ。

「タカシの隠し子か?」

「オイ」

「この商店街の子じゃないねえ」

ミカコが傍に寄り、しゃがんで見ると魔王の後ろに隠れてしまつ。ひざこじをすりむいているが、泣きもしない様子だ。

「おや、魔王ちゃんが好きなんだね」

「小学生ぐらいの姉がいんじやねーの」

「フン。タカシのくせに言いおるわ」

確かに見た目は小学生高学年ぐらいの魔王だが、タカシと同じ高校に通う女子高生だ。

「近くに親らしき人はいないねえ」

「ちよーどいい。懐かれてるし、魔王、親探しに行つて來い」

人通りのない表通りを見て、タカシが道をびしっと指差して言つ。

「なんでワシが。」
「うこうのせロココンのタカシに行かせるべき
じゃろ」

「なに吹聴してんだコラ。しかもお前そういうことをロココンな
んかに任すな」

「認めおつたわ」

「違えーよ！」

また始まつた2人の言い合ひをぽけつと見てゐる幼児の服に触つ
て、ミカコが「迷子札もないねえ」とつぶやく。

「頼むよ。魔王ちゃん。お店はいいから」

「ぬう」

「風呂上りのアイス、もうひとつサービスするから」

「行くぞ、幼児」

「氣イ変わるの早えーよ」

幼児がきゅっと歩き出した魔王の指を握るのを見て、ハツとする
表情を見せる。

「……フン」

幼児のすりむけたひざいそうがくらと光り、治つていぐ。タ
カシがそれに氣づいて、「素直じやねーな」とにやつと笑つ。

「あれが魔王ちゃんの力かい」

「『支配』する力だと。土地でも人でもなんかの優位に立つてり
やそれらを押し潰すことも、助けることも出来るそーだ」

何度もその力で言い様にやられていることにタカシの思い出し怒
り、ミカコが笑つて、しんみりと「早く母親が見つかることねえ
と言ひ。

「わて

幼児を連れて立つてゐる魔王、人の目がそちらを向かず無視され
ている感じだ。そんななかで見覚えのある顔を見つめた。

「甲藤、それとアンナか」

「魔王さん。タカシは？ 遊びに行くとこなんだけど」

「魔王おおつ！ その子は誰だああつ！」

熱く叫ぶアンナに魔王が片耳をふさぐ。隣を歩くミツルも首をかしげ、それを避ける。

「その子、タカシの隠し子？」

「否定されたがこれから証拠を挙げに行くとこひじや」

甲藤ミツルと魔王が話しているところに、アンナが田をきらきらさせながら幼児に近づく。魔王が釘を刺す。

「……食うなよ」

「そんなんじやなああいつ！」

ショックを受けた表情に魔王へ抱きつこうとするアンナをひりつと避け、ベしゃとひざをつく。

「かわいいなー」

ミツルが幼児を見て微笑む姿を見て、地べたに座り込んだままのアンナがいきなりもじもじしながら囁く。

「み、ミツルウゥウウ……そのおおお、そんなに私達の子供が欲しいかあああああああつ！」

言つて恥ずかしい一つ、とこつポーズをアンナが取るがミツルはがんとして無視。すべてアンナの独り相撲で終わつた。

「おぬしは冷たいのう

「なにがー？」

幼児と戯れて楽しそうにしているミツルと、落ち込んでいたアンナの対比を魔王がじーーと見て囁く。

「あ、迷子だつたんだ」

幼児・魔王と並んで歩くミツル、彼の腕を絡め取つて駄々をこねるアンナの目立つ4人組。

「つむ。親探しじや」

「これだけ騒がしいメンバーのなかにいるのに気づかないってことは、親は反対側にいるんじゃない？」

今歩いている方向、小規模の商店街の逆方向を指差すミツル。今

歩いている方向はちなみにミツル達が歩いてきた方向もある。

「名案がある」

魔王が人差し指をピッと上に向け、白慢げに話そつとする。そこ
にまた声をかける制服姿の女子高生。

「魔王、甲藤ミツル、日向アンナか。どうしたんだ」

「そちらこそ、勇者のなかの勇者が商店街に何用かのう」

唐突の出会いだがバチバチッと魔王の一方的な火花を散らす。そ
の痛すぎる視線を避けもせず、幼児の方に気づく。

「迷子か」

「見ればわかるじゃろ。そしておぬしの目的も丸わかりじゃぞ。
よほどタカシが愛しいのじやな」

「変な噂を立てるのはやめてくれないかな。そういう憶測でもの
を言つのは感心しない」

「なら今すぐロターンするのじや。口だけでなく行動を変えるが
いい」

敵対心剥き出しの魔王と淡々と返すカオル、ミツルがやれやれと
ため息をつきながら言つ。

「ウチの生徒会長様と魔王さんは相変わらずだね」

「勇者と魔王は敵同士だからなああつ！」

ミツルがどう收拾付けようかと面白そうに見ていると、幼児が魔
王の指を強く握る。それで魔王が我に返る。

「おお、おぬしと言ひ争つている場合ではないわ」

「親探しなら手伝つよ。その子の名前は？」

「おぬしには話さぬ」

「魔王さんも知らないそうです」

「わかった」

協力を申し出るカオルに魔王は反発するが、ミツルが口を挟むな
どのフオローもしつつ魔王をなだめる。

「具体的には？」

「商店街の皆さんに協力を仰ぐ」

力オルがたたつと近くの店に駆け寄り、挨拶をすると店の人気がここにことしながら対応する。

「……どういうことだあああああっ、ミツルウウウウッ！」

「この商店街にある連絡網を使わせてもらつんだよ
店の人気が電話をかけると、すぐ次の店に繋がり、それがどんどんと広がっていく。

『名前はわからない、服の特徴、3歳ぐらいの幼児の親を探している。商店街のなか、麻島青果店まで来てほしい』

「」れだけ（商店街の人）が早く動いてくれるのは斗葉高校に超・生徒会がこの人あり、無敵の生徒会長と言われるだけの知名度と信頼があつての芸当だね』

こここの商店街にスピーカーがないので、連絡網であれば労力も少なくですむ。

「凄いなああっ！」

感心するミツルとアンナ、むくれている魔王。

「ワシがやろうとしていたのに……」

「ちょっと遅かったね」

ミツルが言つていて、魔王がおぬしらと話していたせいじゃと言ひ返された。ミツルは首をすくめる。

「麻島青果店に行こう」

力オルが戻ってきて、先導する。憮然としている魔王が幼児を連れでそれを追い抜く。苦笑するミツルとアンナもついていった。

麻島青果店の前で談笑する皆、魔王は幼児をじっと見ている。

「……えなちゃんっ」

母親らしき人が駆け寄つてくると、幼児がとてとてとそれに近づいていく。

「ダメじゃないの、勝手に離れて」

怒鳴られ、びくつと首をすくめるえなちゃんが火がついたように泣き出した。

「ああもう、この子は。どうせ殴るぞ、お騒がせしました」

「走つて搜してたら肉屋さんにてかかれで」とぺこぺこと謝る

母親、えなちゃんは泣き放しでいる。//カロがいえいえ、と囁く。

「ちよつと田を離しただけで、もう、本当にすみません」

母親が泣くえなちゃんの手をぐいぐいと引き、麻島青果店から離れようとする。

「ここは母親、待て」

魔王が止めに入り、母親が振り向く。

「それ以上、そこへえなに当たるべきじゃないな」

「……何ですか」

「えなを連れ、親を探したのはワシジジヤ」

母親がそうですか、とつぶやく。

「この子のためにありがとう」わざわざ

「礼など要らぬ

きつぱりと言つ魔王、母親があっけに取られている。

「えなに謝れ」

「何を」と母親が喋るのを魔王が遮る。

「田を離したのはおぬしじゃ。責はおぬしにある」

母親がなんなの、と魔王をキッとにらむ。

「えなは一言も口をきかなかつた。ひやじわうをすりむこても歯を食いしばつて、おぬしに再び会えるまで泣くのを我慢しておつた」

ぎゅっと魔王の指を握り締めていたえなの姿。

「今の」時勢に、子供から田を離してどうする。此時も離れてやらなのが親ではないのか

ぎりと魔王が唇をかみ締める。

「現にこんなワシなんかのあとにきてしまつくり、不安で、どうしたらいいのかわからぬ子をどうして田を離す」

フンと魔王が下からがんをつけようと、にらむ。

「大方、どこぞの知り合こと出合つて話しこんだんじやろ」

凶星を刺されたのか、わなわなと母親が震え、思わず怒鳴った。

「わたしはこの子を必死に捜してましたっ」

「どうでもいいわっ！ それに必死なら、何故頼ろうとせぬっ

魔王の剣幕に母親が退きかける。

「おぬしは周りを何故頼らぬのじゅ」

「周りって……」

母親が辺りを見ると商店街の人達が集まつてきている。

「ただ一言、子供がいないことを誰かに話したか」

「バカじゃないの、アナタ。……見知らぬ人に話せるわけないじゃない」

腕を組み、母親はそっぽを向く。

「そうか。おぬしは恥をかきたくなかったのじゅな」

「な……」

「ある教師から教わった言葉じゅ。『聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥』」

数式を黒板に書きながら、ある教師はいつもそういう言ひ方。

「一言、一言でもここにいる者にそれを聞けば、早くなくとも話は広がる。一人で捜すよりずっと早く見つかるじゅう」

「それは……」

「言えればおぬしは子から目を離したダメな親として周囲から見られよう。しかし、聞かず誰にも頼らざして子を失う悲しみを負うよりはずつといいとは思わぬか」

不穏な社会の、黒く怪しい手や影にえなちゃんがさらわれてしまふイメージがありありと脳裏に浮かぶ。

「そうなれば、後で泣いて周りを訴えたといひどりうつむないじゅる」

「もう見つかったからいいでしょう」

「それは結果としてじゅ！」

魔王が母親を見つめる。過ぎた今を「もし」と意味は無い。しかし、結果によつては「もし」としか学べないこともある。

「世のなかまだ捨てたものじゃないぞ。悪人より善人の方がまだ多い。少なくとも、この商店街のなかにえなをさらひやつせおらぬ」

半泣きのえなが母親をじつと見て、それから魔王を見る。

「悪人がさらうより先に、多くいるこここの者がえなを見つけてくれたろう」

母親がきょろきょろと周りを見て、歯を食いしばる。

「たつた一言の恥で、おぬしはこれだけの味方を得ることが出来たのじゃ」「？」

魔王がタカシ、ミカコ、商店街にいる皆の顔を見る。

母親をにらみつける魔王が、ふと氣づく。力強く、いつの間にか回り込んでいたえながその服のすそをつかんでいる。最初の時とは違う。

抗議しとるのか。

これ以上お母さんをいじめないで、と魔王に訴えてくるのだ。そして、今浮かべている涙は母親に叱られたから出ているものではないのだろう。

「……とはい、結果的にこれだけの面前でワシはおぬしに二重に恥をかせた。それは謝ろう」

優しいえなの頭を撫でてから、ぺこりと深々と魔王は頭を下げた。

「じゃから、えなを泣かせんてくれ」

「……」

複雑そうな表情の母親がえなを見て、小刻みに震えている。言いたいことは伝わっているはずだ。

「気持ちはわかるけど、魔王、それじゃ駄目だ」

すっと一步前に出るカオル、その言葉を聞いて魔王が頭を上げる

「えなちゃんのお母さん、お騒がせして申し訳ありませんでした。」

商店街の皆さんに協力を仰いだのは私です

無敵の生徒会長も頭を下げ、その状態で少しだけ顔を上げ、視線を母親にやる。その表情は不敵そのものだ。

「これからも、どうぞ白斗商店街の方を『ひこき』に願います。あっけに取られる周囲、タカシは額を押さえ、ミカ『はにじて』している。母親はくつと踵を返す。

「一度と来ないわ……」

えなの手を引き、捨て台詞を残して周りを押しのけるように母親が去つていいく。拍手も歓声も何も起きたことはなかつた。

翌日。なんとなく物思いにふけつていよいような表情を魔王は見せている。タカシが軒先でヤンキー座りをしながら、ダンボールに色々な野菜を詰めこんでいる。

「えなちゃんのことか」

ちろつとタカシの顔を見て、魔王がふうつとため息をつく。

「……一発で名前を覚えおつたか、この口リコンめ」

「あれだけ騒ぎや誰だつておぼえるわ、しかも昨日の『ことだら一がつ』

ねぎを持つて憤るタカシを見て、魔王がふーっと長いため息をつく。それを見てタカシはまた座り、魔王の方を見ずに言う。

「なんか昨日は大演説だつたな」

皮肉をこめてタカシが話しかけると、魔王がつむと応える。アルティマジコマイダ

「隣の次元におつた頃から、ワシには両親の記憶が無い。……じやからかもしれん」

「そうか」

「あの小さな掌のよつて、ワシも祖父の指を握つておつたんじやろうか」

既に忘れてしもつたわい、と魔王が青空を見上げて呟つ。タカシが自転車に季節の野菜入り段ボール箱を載せる。

「えなは、また来てくれるじゃろうか」

「母親共々一度とウチには来ねーんじゃねーの。あんなこと言わ
れちや」

呼び込みする前にか、どがくつと魔王が肩を落とす。昨日からだ
が、魔王の呼び込みでは密が入っていないらし。

「トライアングルに行ってくらー」

奥から「あいよー」とミカコの声が返つてくる。魔王がふと通り
を左から右へと見てみる。

「まー」

とてとてとえなちゃんが魔王のところに向かつて歩いてくるのが
見える。そのまま後ろにはあの母親がいて、自転車に乗りかけたタ
カシもその状態で固まつて・止まつている。

「おおっ」

嬉しそうに魔王がえなちゃんを抱き上げる。母親が敵意とも何とも
いえない表情と田でそれを見ている。意地悪そうに魔王が、母親
の顔を見ずに言つ。

「一度と来ないんじゃなかつたかのう」

母親がフンとえなちゃんを魔王から受け取り、抱きかかえる。

「……一度とあんなことにほさせないけど、もしまだ恥をかくな
ら……知らないところより、もうすでに恥をさらされたところの方が
いいと思つただけよ」

えなちゃんがぎゅーっと母親の髪をつかみ、幸せそうにハーフハーフ
としている。魔王とタカシが田配せして、タカシは自転車にまたが
つてこぎ始め、魔王がにやつと笑つて言つ。

「よくぞ参つた、このワシジが住まう麻島青果店に
がくつとタカシが自転車から落ちるような反応を示し、母親もぽ
かんとしている。

「だ・か・ら、参れとかそんな呼び込みで密が入るかつ。フツー
に、らつしゃい・でいーだる」

「魔王たるもの普通ではいかんのじやつ」

『あぎやあとくだらないことで言い合つて人に、ミカコがなん

だなんだと出でくる。呆然と2人を見てあきれた表情を見せていた
えなの母親が、くすつと笑つた。

「あー」

母親の笑顔を見て、上機嫌にえなも笑う。

どんな時代でも、子供が笑顔でいられることこそ何よりのものだ。

【常木えなの場合】（後書き）

前回からだいぶ間が空いてしまいました。
今度はいつになるのだろう……。

えなちゃんは本編には出てこません。念のため。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5911d/>

タカシと愉快な学友共めひれ伏すがいい。徒然なるままに。

2010年10月14日19時15分発行